

北信越地区小中学校のアダプテッド・スポーツ実施状況について

○金田安正（びわこ成蹊スポーツ大学）、
若月博延（金城大学短期大学）、山崎昌廣（広島大学大学院）

小中学校における障害児の体育指導の現状を明らかにし、今後の課題を明確にすることを目的として全国の小中学校を対象として郵送アンケートによる調査を実施した。そのうち、北信越5県（長野、新潟、富山、石川、福井）を対象として調査したので、その結果を報告する。

小学校400校、中学校180校に対し調査を行ったところ、小学校158校、中学校82校から回答を得た。

実施形態としては「障害児学級だけ」は少なく、「一部は通常学級」、「すべてが通常学級」と、それぞれ小学校中学校とも3割行われていた。

種目的には、小学校の通常学級では短距離走、マット運動、鉄棒、リレーなど、中学校の通常学級では、短距離走、バレーボールが多かった。

学校行事は、「見学」が小学校では少ないが、「障害のない児童と一緒に参加」が、小中学校とも7割、「障害に応じてできる範囲で参加」が小、中学校とも5割と多かった。

通常学級での体育については、「障害児を理解するのに有効」、「障害児が関係を学ぶのに有効」と考えるのが7割を超えており、「運動を好きになること」、「運動を楽しめるように」、「友だちと仲良くする態度」など、さらに加えて、中学校では「健康や安全に配慮する態度」、「体力をつけること」、「健康の保持・増進」などが重要と認識していた。しかし、授業の展開が十分でないことから、「障害者スポーツの知識が必要」と応えたのが8割、「研修が必要」と応えたのが5割と多かった。

女子大学生のアダプテッド・スポーツに対するイメージについて

○高橋和文（金城学院大学）、稲嶋修一郎（東海学園大学）、
中島史朗、山崎昌廣（広島大学大学院）

はじめに：現代の日本の社会において、スポーツは非常に身近な存在である。小学校から大学まで、体育やスポーツの授業が実施され、地域のクラブ活動やサークル活動も盛んである。マスメディアを通じたスポーツに関する情報もあふれており、スポーツ活動は、我が国における一つの文化として位置付けられている。

障害者のスポーツ活動についても、パラリンピックのニュースが、テレビ等で紹介されることも多くなり、新聞では社会面からスポーツ面の記事として扱われるようになってきた。マスメディアでの露出が増えることにより、障害者のスポーツ活動に関する一般的な認知度は、少しずつではあるが高まってきているように思われる。

また、小中学校においては平成14年度から、高等学校においては平成15年度から「総合的な学習の時間」が本格的に実施されている。この「総合的な学習の時間」では、ボランティア活動や体験教室などを通して、障害者や高齢者の方々との交流もなされている。平成18年度以降に大学に進学した1・2年生の多くは、この「総合的な学習の時間」を受講しており、障害体験学習や障害理解教育などを体験している者も少なくない。

本研究では、「総合的な学習の時間」を経験している大学1・2年生を対象に、障害のある人との交流体験の現状を把握するとともに、アダプテッド・スポーツの認知度やそのイメージについての基礎的資料を得ることを目的とした。

方法：愛知県内の大学に通う1・2年生の女子大学生250名を対象に質問紙調査を行った。調査項目は、障害者との交流経験、障害者に対するイメージ、アダプテッド・スポーツに対するイメージとその認知度の4項目とした。調査期間は、2007年7月23日（月）～2007年8月3日（金）であった。調査書配布に当たりその趣旨及び個人情報保護に関する基本方針を説明し、本人の同意を得た。

ドイツの初等・中等教育における障害児の体育実践—インクルーシブな体育授業実践の調査から—

安井友康（北海道教育大学）

【はじめに】

ドイツでは、州ごとに日本の学習指導要領にあたる教育課程を規定する法規（Rahmenlernplan）が定められ、各地で様々な授業の取り組みが行われている。ドイツで取り組まれてきた障害児の体育授業の様子を特にインクルーシブな授業に焦点をあて、その授業の実態を調査するとともに、背景となる取り組みや考え方、指導者の育成などに関して検討した。

【方法】

2005～2007年、定期的に教員養成機関や学校への訪問調査を行い、指導者へのインタビュー、映像による授業実践の記録、その他の資料収集を行なった。

【結果と考察】

比較的早くから統合教育にとり組んできたベルリン市州や実験的な取り組みを進めるブランデンブルク州、また地方都市型の標準的な授業形態を展開するニーダーザクセン州などの障害児の体育授業については、実験的な教育的取り組みが行われており、これらの授業実践は今後進むことが予想される日本におけるインクルーシブな体育授業に対しても大いに参考になるものと考えられた。

糸賀一雄の取り組み、・・・ではなく・・・をである

橋谷俊胤（ビィガ山王リハビリ）

【目的】

糸賀一雄さんが、昨年高谷清さんにより「異質の光」の題名で出版されました。今年になりNHKが総合テレビ、BSと2回にわたり糸賀一雄さんを放映している。糸賀さんの業績は戦後まもなく戦争の犠牲になった子どもたちを、守ることとともに「障害のある子どもに取り組み、わが国の社会の要求にしっかりと応じられるものにした」と近江学園（1946・11）びわこ学園（1963・4）を設立した。あれから60年経過した今日に、その取り組み、実績、考え方が、今の時代にも脈々と流れ、今の時代だからこそ、そのことが必要ではないかと思い取り上げてみました

【方法】

内容は著者の高谷清氏の異質の光から引用させて頂く。

【考察及び結果】

糸賀は、子どもたちの「発達段階のなかで、発達そのものはむしろ「ヨコ」の広がりの中身である。ヨコの広がりとは、かけがいのないその人の個性です、療育とは、あらゆる発達段階の中にあつて、その子がかけがいのない個性を形成していくプロセスであるといえます。「この子らに世の光を」当ててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。「この子らを世の光に」であるこの光は、この人びとから放たれているばかりでなく、この人びとと共に生きようとしている人びとからも放たれ、その能力は、あやまった教育と生活のために、長いあいだ隠されており、はたらきがぶってしまったのである。

総合型地域スポーツクラブへの障がい者の参加システムの検討—特別支援学校の課外活動の特徴に着目して—

奥田睦子（金沢大学）

【目的】

本研究では、特別支援学校の課外活動の特徴にヒントを得なが

第28回医療体育研究会/第11回日本アダプテッド体育・スポーツ学会 第9回合同大会 抄録集

ら、障がい者の総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）への日常的・永続的に参加できるシステムを検討することを目的とした。

【手順】

富山県内の特別支援学校を対象として部活動の特徴を把握するためのアンケート調査を実施し（2007年4月実施）、その結果を基に、課外や卒業後にも児童・生徒が地域で活動する際には地域にどのような体制が必要であるのかを検討した。また、ここで検討された内容と、富山県内の総合型クラブを対象として行った障がい者が参加できる体制づくりに向けてのクラブの課題に関するアンケート調査の結果（2006年2月実施、昨年発表）とを踏まえて、障がいのある子どもの学校体育から生涯スポーツへの橋渡しがスムーズに行われるような総合型クラブの体制の構築に向けて必要なことについて検討した。

【結果と考察】

障がい者の総合型クラブへの日常的・永続的に参加できるシステムを構築するためには、特別支援学校を拠点としたプログラムの実施や、総合型クラブで個人で活動するような障がい者に対しての公的な助成制度の構築、総合型クラブと医療機関との連携体制の構築、総合型クラブへの障がい者の送迎方法を検討すること等が必要であることが明らかとなった。

小中学校に在籍する障害のある児童・生徒の体育実施状況 —関東地区の調査結果から—

○齊藤まゆみ（筑波大学）、山崎昌廣（広島大学）

関東地区の小中学校における障害児の体育実施状況を明らかにすることを目的に、質問紙によるアンケート調査を行った。対象は関東地区の小学校400校、中学校180校であり、そのうち小学校137校（回収率34.3%）、中学校63校（回収率35.0%）から回答を得た。

障害のある児童生徒の体育授業実施形態は、小学校ではすべて通常の学級で実施53校（40.4%）の割合が最も高く、次いで障害児学級だけで実施が43校（32.8%）であった。中学校では障害児学級だけで実施が32校（59.3%）、次いですべて通常の学級で実施12校（22.2%）であり、小学校と中学校で実施形態に差が見られた。また、体育祭や運動会などの参加の仕方については、障害の程度に応じてできる範囲で参加を含め、障害のない児童・生徒と一緒に参加していることが示された。

体育授業で重要と思われる目標については、運動を好きになることや楽しめるようになること、仲間との協力や交流、体力をつけることや、健康の保持増進が小中学校ともに重要だと考えられていた。

体育授業を実施するにあたっての配慮点や取り組みの状況については、体育の重要性が共通認識としてあり、障害にあわせてルール、用具、評価法などの工夫を行っていることが示された。しかし、授業者の数や用具・教材などが十分ではない現状も伺えた。

通常学級で障害のある児童生徒が体育授業を行う場合の効果や課題については、健常児が障害を理解することや障害児が健常児との関係のとりかたを学ぶことが有効であると考えられていた。課題として、障害児のペースで授業ができないことが示されたが、授業を成立させることや、健常児に負担がかかることについては、あまり問題視されていなかった。また、アダプテッド・スポーツの必要性は認めているが、現状は情報や研修などで不十分なことが多いと感じていることも示唆された。

障害のある児童の体育授業に関する小学校教員の意識調査

○佐藤智恵（広島大学大学院）、田中沙織（広島大学大学院）、七木田敦（広島大学）、山崎昌廣（広島大学）

【目的】体育授業において教師による適切な支援が行われないと、障害児や特別な支援の必要な児童は、運動に苦手意識を感じたり、自己肯定感を低くしたりということが考えられる。これには、教員が障害児の体育授業において、何を目標にするかに拠る部分が大きいことが考えられ、教員の障害児の体育授業に対する考え方が影響していると思われる。そこで、本研究では、障害児や特別な支援の必要な児童の体育の授業を受け持っている教員が、どのようなことを重要と考えているのかについて明らかにする。

【方法】広島県・山口県・鳥根県・香川県・徳島県の小学校300校に対して、郵送にてアンケート用紙を送付した。回収数は150部、回収率は50.0%であった。アンケートでは、障害のある児童の体育授業の目標について何が重要と考えているのかについて、14項目に関して5件法（1.全くそう思わない 2.あまりそう思わない 3.どちらともいえない 4.ややそう思う 5.とてもそう思うの）にてアンケート調査をおこなった。

【結果と考察】多くの教員が「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答した項目には、「運動を楽しめるようになること」（96%）、「運動を好きになること」（93.3%）などが挙げられた。また「全くそう思わない」「あまりそう思わない」と回答したものが多い項目には、「スポーツ観戦を楽しめるようになること」（19.3%）、「学外にあるスポーツ施設を活用できるようにすること」（14.7%）、「運動技能を高めること」（11.4%）、などの4項目が挙げられた。この結果より、小学校教員は運動技能の習得よりも、児童の運動に対する意欲や楽しさを重視し、児童の様子にあった授業を行っていることが分かった。また学外のスポーツ活動をそれほど重要視していないことから、障害のある児童の学外での余暇活動としてのスポーツは、小学校年齢においてはまだ考えられていないことが示唆された。

中学校に在籍する障害のある生徒の体育の実施状況に関する調査 —中国・四国地方における調査から—

○田中沙織、佐藤智恵（広島大学大学院教育学研究科）、七木田敦、山崎昌廣（広島大学）

1. 目的および方法

本研究では、中国・四国地方における中学校に在籍する障害のある生徒の体育授業の実施状況について明らかにすることを目的に、中学校150校に対し、独自に作成し配布したアンケート調査を行った。回答数は、広島20・山口19・香川23・徳島3の計65校であった。

2. 結果及び考察

体育授業の目標の重要度について、最も重要度が高かったのが「運動を楽しめるようになること」であった。次いで「健康や安全に配慮する態度を養うこと」であり、重要度が低かったのが「学外にあるスポーツ施設を活用できるようにすること」次いで「運動技能を高めること」であった。障害を持つ生徒が参加する体育授業に関して、「体育は重要であると」考える教師は86.2%にのぼるが、「実施できる種目が少ない」という悩みを持つ教師が3割を上回った。障害がある生徒が通常学級で行う体育授業について、「ほかの子どもとの関係のとり方を学ぶのに有効である」と答えた教師が73.9%見られた一方「障害のある子どものペースで授業ができない」という回答が41.6%見られた。

心身の健康や発育発達の視点からみて、障害を持つ生徒にとって体育授業の持つ意義は大きいと考えられる。生徒の障害の特性や程度も様々であるが、障害の状態や能力に応じて、習得可能な運動を課すことが課題となる。